

和歌文学に現れた「紅」

中西 満義

はじめに

能楽に用いられる衣装、いわゆる能装束には、独特な名称や表現が多い。その特徴的な表現の一つに「紅入（紅無）」がある。「いろいろ（いろなし）」と読むが、たとえば、三番目物（鬘物）の前シテの扮装として、よく目にするのが「唐織紅入着流し」である。金糸・銀糸を使い絢爛たる図柄や文様を織りなした唐織に、紅色の加わったより華やかなものは、若い女性の役に、一方、紅色を用いないものは、中年以後の女性や靈性を帯びた女性の役に用いられる。女性の扮装においては、装束の「紅入」「紅無」に加えて、使われる能面によって、登場する女性のおおよそが理解される仕組みとなっていて、前シテの扮装に「若女 唐織紅入着流し」とあれば、自ずと観客は若くたおやかな女主人公を想起するのである。

中世軍記物の傑作『平家物語』は合戦中の逸話をも描いていて魅力的であるが、その中でもとりわけ印象的な章段が「扇的」（「那須与一」）である。海上と陸とで相對峙する平家軍と源氏軍、日の暮れも近づき今日の死闘もこれまでとされたとき、沖の方から立派に飾り立てた小舟が汀に向かって寄って来た。何事かと見守る義経たちの前で、つぎのような事が起きた。

舟のうちよりよはひ十八九ばかりなる女房の、まことに優にうつくしきが、柳の五衣に紅の袴着て、みな紅の扇の日いだしたるを、舟のせがいははさみたてて、陸へむいてぞまねいたる。（卷第十一）

この後、義経の命を受けた那須与一宗高は、首尾よく扇を射落とすことに成功したが、右のような行為は、合戦の最中の風流事というよりは、あまりに大胆、かつ、挑発的である。否、金色の日輪を描いた紅一色の扇を船棚に差し挟んだ女性の出で立ちが、何よりも、挑発的なのである。襲の色目で柳は、表白、裏淡青というが、それに紅色の袴を着た「優にうつくしき」「十八九ばかりなる女房」は、殺伐とした戦場には不似合いである。爛漫とした春色を表す「柳は緑、花は紅」の詩句をも想起させる上の

表現は、むくつけき源氏の武士たちが船上の女房にしばし心奪われたことを暗に物語ってもいるだろう。

さらに、『平家物語』は、西海の藻屑と散ってしまった平家一門の最期の様子を

海上には赤旗、赤印、投げすてかなぐりすてたりければ、竜田河の紅葉葉を嵐の吹きちらしたるがごとし。みぎはに寄する白浪も薄紅にぞなりにける。(巻第十一、「内侍所都入」)

と描写している。生け捕りにされた者の苛酷な人生が残る一方で、西海の海上に映し出された景色は、まことに美しい。

小稿では、色の代名詞としても用いられた「紅」について、主に和歌文学の用例に拠りつつ、その表現の特徴を明らかにしてみたい。「紅」という色が内包するイメージとは、いかなるものであったのだろうか。

1. 「紅」の語誌

「紅」の文字は、糸+工によって形成される。音符の工は烘に通じ、赤いかがり火、赤い糸を表す。漢音ではコウ、呉音ではグ、訓みはくれない、あるいは、べに。字義は、あざやかな赤色、あざやかな赤色のさま、そして、その原料となるくれなる（べに）の花で、それによって作り出されるべに、紅色の顔料（口紅など）をも意味するようになった。さらに、赤い花、赤い花びら、という意から転じて、花のような女性を指すようになった。また、音符の工から、手仕事、細工仕事をも意味し、「女紅」の語が見られるように、女性の手仕事をも意味した。

また、「紅」は、めでたい事、よい事の意味を有し、寵を得る、もてはやされる、の意にも用いられた。今日では「紅白」と言えば、慶事を象徴する色の取り合わせのように考えられているが、清の制度では、八旗官員の家に吉凶の事ある時、吉事を紅と言い、凶事を白と言った（大漢和）とあるように、「紅白」という対の組み合わせは、ただに慶事のみを意味するものでなかったことは注意する必要がある。ともあれ、「紅」は、慶事・吉事を指し示すめでたい色であり、惣じて女性に関わることの多い色名と言ってよいだろう。

鮮やかで明るい赤色を表す「紅」、大宝衣服令では「紅」を「ヒ」と読

ませていたことからすると、黄みを帯びた赤色を指していたと考えられる。中近東、エジプトを原産地とする紅花を原料とするが、我が国には、四～五世紀頃、中国を経て伝えられた。奈良時代から平安時代にかけて、それまで赤色の主役だった茜と交替して紅色が流行することとなった。紅花は花が末から開き、しだいに本に咲き、咲いたものから摘み取っていくことから末摘花（すえつむはな、うれつむはな）とも称されるが、呉（国名）からでた藍（染料）という意で、呉藍（くれのあい→くれない）と称されるようになったという説がある。

紅花には、赤と黄の色素が含まれており、水溶性の黄色素を除いて、残った絞り汁（染液）で麻布を染めると薄い紅色が染まる。その麻布から赤色素を溶かし、その液に梅酢を加えて絹布を浸すと薄い紅色が染まる。紅色は、褪めやすい色で、

1 紅はうつろふものぞ椽（つるばみ）の馴れし衣に猶しかめやも
（万葉・一八・四一〇九）

2 紅にそめし心もたのまれず人をあくにはうつるてふなり
（古今・一九・雑体・一〇四四）

のように、「うつろうもの」の喩えとしても用いられた。

さらに、紅花を繰り返し染めれば鮮やかな濃い紅色が染まり、在原業平の名歌

3 ちはやぶる神代もきかず龍田河からくれなるに水くくるとは
（古今・五・秋歌下・二九四）

に詠まれるように、韓（朝鮮の古称）紅（からくれない）と呼ばれた。何度も染めた紅色は、

4 くれなるの深染めの衣（こそめのころも、ふかそめのきぬ）……
（万葉・一一・二六二四）

とあるように、「深紅（こきくれなる）」とも呼ばれたが、

5 紅の八入の衣朝な朝ななれはすれどもいやめづらしも
（万葉・一一・二六二三）

と、「紅の八入（やしお）」とも呼ばれ珍重された。一度染めることを一入と言い、八入は何度も染めたものの意で、実朝歌

6 紅の千しほのまふり山の端に日の入る時の空にぞありける

(金槐集・七一〇)

の「千しほ」は、山の端に沈みかけていく落日の色合いを何度も何度も染め抜いた色濃い紅と表現したものである。

2. 濡れて色まさる紅

ここからは、『万葉集』、ならびに八代集を中心にして、和歌文学に現れた「紅」の諸相を示していこう。

まず、自然の景物を捉えたものを見ていくと、

7 時雨の雨間無くな降りそ紅にはほへる山の散らまく惜しも

(万葉・巻八・一五九四)

と、秋山の紅葉の彩りを詠んだものが目に止まる。7 歌は、せっかく色付いた秋山の紅葉の散ってしまうのが惜しいから、時雨よ絶え間なく降るな、と言っているのであるが、時雨の雨によって秋山の紅色が際立っていることは重要である。

つぎに、川に散り落ちた紅葉葉を紅と表現したものとして、『古今集』では、

8 紅葉葉の流れとまるみなとは紅深き浪や立つらむ

(秋歌下・二九三)

の索性歌と、前掲業平歌

3 ちはやぶる神代もきかず龍田河から紅に水くくるとは

(秋歌下・二九四)

の二首を挙げることができる。3 の業平歌については、古来「水くくる」か「水くぐる」かで諸説あるが、紅葉葉が川の水と触れ合うことで、澄明感が増している状態を捉えている。紅と表現された紅葉葉は、水に濡れることによってより色鮮やかなものとして捉えられるのである。

以後、川の紅葉葉は、『後撰集』に

9 龍田河色紅になりにけり山の紅葉ぞ今は散るらし (秋下・四一三)
の一首が、そして、『新古今集』に

10 飛鳥河せぜに浪よる紅やかづらき山のこがらしの風

(秋歌下・五四二、長方)

の一首が載る。10歌は、9歌と発想において同工異曲と言えるが、紅と表された視覚表現に加えて、空間を別にする山の「こがらしの風」を想起しているところが、すなわち、視覚と聴覚とが組み合わされて捉えられているところが、いかにも新古今的である。

続いて『後拾遺集』春部に連続して配置されている「岩つつじ」を詠じた二首を挙げておこう。

11 岩つつじ折りもてぞ見るせこが着し紅染めの色に似たれば

(春下・一五〇、和泉式部)

12 わぎもこが紅染めの色と見てなづさはれぬる岩つつじかな

(春下・一五一、義孝)

11の和泉式部歌は、岩つつじを折り持ってふと見入ることだ、と初二句で説明した後、いとしいあの人が着ていた紅染めの衣の色に似ているので、と三句以後でその理由を表明したもので、12の義孝歌は、それとは逆に、いとしいあの女性の紅染めの衣を見ると、知らず知らず、岩つつじの花が親しく思われる、というものである。11歌は、女性の立場からいとしい男性(の衣)と岩つつじを捉えたもの、12歌は、男性の立場からいとしい女性(の衣)と岩つつじを捉えたもので、面白い対をなす。

右の二首の影響に拠るものか、『金葉集』には、夕日に照らされて色映える岩つつじを詠じた

13 入日さす夕紅の色はえて山した照らす岩つつじかな

(春部・八〇、参河)

の一首が入集を見ている。

また、『詞花集』には、「京極前太政大臣(師実)家に歌合し侍りけるによめる」と詞書された康資王母の

14 紅の薄花ざくらにはほはずはみな白雲とみてや過ぎまし (春・一八、)

という一首が見られる。山の桜を白雲に喩えることは古今集以来の常套表現と言えるが、14歌は敢えて「紅の(薄花)桜」と詠んでいる。このような点も含めてであろうか、14歌にたいして、判者経信は、「くれなるの桜は詩には作れども歌に詠みたることなむなき」と、難点を指摘した。その経信の判定を承けて亭主であった師実は、康資王母につきのような歌を贈った。

15 白雲は立ちへだつれど紅の薄花ざくら心にぞ染む (春・一九)

15歌は、あなたの歌にたいして無理解を示す人はいるけれども(白雲は立ちへだつれど)、あなたがお詠みになった「紅の薄花ざくら」は、私の心を深く染めました、という意で、自作に賛意を示した師実には康資王母は、つぎのような歌を返している。

16 白雲はさも立たばたて紅のいまひとしほを君し染むれば(春・二〇)

康資王母歌をめぐる一連の三首にも見受けられる「白」と「紅」という語感上のコントラストは、

17 紅に見えし梢も雪ふれば白木綿かくる神無備の森

(冬・一五七、忠通)

にも見て取れるが、「あかし」に「明かし」と「赤し」とを読み取った『拾遺集』の

18 白妙の白き月をも紅の色をもなどかあかしといふらん

(雑下・五一八)

という問答歌にも、「白」と「紅」との対表現に興じている様が見て取れる。さらに、『新古今集』には、紅梅と白雪とを取り合わせた

19 折られけり紅にほふ梅の花今朝白妙に雪はふりつつ

(春歌上・四一、頼通)

があり、「紅白」という色彩の取り合わせが、まことに鮮明な印象を与えるものであったことを物語っている。

その他、勅撰集以外ではあるが特異な用例として、蓼の穂を詠んだつぎの西行歌がある。

20 紅の色なりながら蓼の穂のからしや人のめにもたてぬは

(山家集・一〇一六)

見た目は紅花と変わらない紅色なのに、蓼の穂は辛い^{から}からだろうか、人からまったく見向きもされないことは辛い^{つら}ことだ、と詠む。掛詞、縁語を用いた諧謔的表現が目立つが、見逃せない一首である。

3. 喩としての紅

前節では、紅と表現された自然の景物を見てきたが、川の紅葉葉に代表されるように、紅には水に濡れて色まさるという特質が見て取れた。ここ

では、「紅涙」の訳語としての「くれなるの涙」をはじめとして、紅という色が喩える内容を瞥見しておきたい。

まず、「紅」と「涙」との取り合わせで、『古今集』の貫之歌を掲げてみよう。

21 紅のふりいでつつなく涙には袂のみこそ色まさりけれ

(古今・恋歌二・五九八)

22 白玉と見えし涙も年ふればから紅にうつろひにけり

(古今・恋歌二・五九九)

上の二首は、ひたすら待ち続ける女性の堪えきれないところにまできた状態を紅の涙によって表現したもので、漢語「紅涙」を和歌に取り込んだ典型例と言える。21歌の「ふりいでつつなく」は、同じ『古今集』のよみ人しらず歌

23 思ひ出づるときはの山の郭公から紅に振りいでてぞなく

(夏歌・一四八)

に倣ったもので、紅色に濡れた「袂」と巧みに繋がっている。22歌は、透明な玉かと見えし私の涙も、あの人を恋し続けることによって紅に変わってしまった、とわが身を詠嘆したもので、白(玉)と紅の取り合わせにも意が凝らされている。また、23歌の「ときはの山」の緑と紅の取り合わせも清新である。

以後、女性のやるせない恋情を表現する語として、紅は涙とともに用いられることになる。つれない相手を恨む心を、紅色に染まる涙によって表現した『後撰集』の

24 紅に袖をのみこそ染めてけれ君を恨むる涙かかりて

(恋歌四・八一〇)

さらに、

25 紅の濃染の衣うへにきむこひの涙の色隠るやと

(恋上・二一八、顕綱)

26 忍ぶれど涙ぞしるき紅に物思ふ袖は染むべかりけり

(恋上・二一九、道済)

27 紅に涙の色もなりにけり変はるは人の心のみかは

(恋上・二二〇、雅光)

といった『詞花集』の三首、そして、『千載集』の

28 紅にしほれし袖も朽ちはてぬあらばや人に色も見すべき

(恋歌三・八三二、若水)

また、『新古今集』の

29 紅に涙の色のなり行くをいくしほまでと君にとはばや

(恋歌二・一一二三、道因)

など、紅は恋に物思う女性の涙の色として定着をみる。なお、『千載集』には、親子離別の際に流す涙を

30 忍べどもこの別れ路を思ふにはから紅の涙こそふれ

(離別歌・四九一)

と詠じた成尋法師母の歌も見られる。

このように、漢語「紅涙」は、恋歌の鍵語として、平安朝和歌においてさまざまなバリエーションをもって表現され続けたのであるが、その成立の過程については、伊原昭氏「くれなるのみみだ一字津保物語における」(『平安朝文学の色相』所収)に詳しい。ここでは、紅によって表された涙が、(美しい)女性の流す涙であり、さらにその多くが恋情によって起因するものであったことを確認しておきたい。

紅と喩えられた涙の色は、恋の物思いに沈む女性を象徴するものであったが、紅花染めに関わる表現もさまざまな恋情を喩えつつ用いられた。前掲万葉歌

1 紅はうつろふものぞ椽の馴れし衣に猶しかめやも(一八・四一〇九)
の紅は、移ろいやすいものの喩えとして、椽の妻にたいするに遊女をも暗示する。一方、

31 紅に染めてし衣雨降りてにほひはすとも移ろはめやも

(一六・三八七七)

32 くれなるの深染めの衣色深く染みにしかばか忘れかねつる

(一一・二六二四)

の紅は、それぞれ、深い恋情の喩えとして用いられている。そして、

33 人知れず思へばくるし紅のすゑつむ花の色に出でなむ

(恋歌一・四九六)

の古今歌は、

34 よそにのみ見つつ恋ひなむ紅の末摘花の色に出でずとも

(一〇・一九九七)

という万葉歌を踏まえつつ、苦しく切ない恋情を表現する。『古今集』には、ほかに

35 紅の色には出でじ隠れ沼の下にかよひて恋ひは死ぬとも

(恋歌三・六六一)

といった、「寛平御時后宮歌合」の友則歌が見出せる。堪えに堪え続けた激しい恋情を「紅の色」と喩えた一首である。なお、34の万葉歌は、多少の字句の異同を伴いながら、

36 よそにのみ見てやは恋ひむ紅の末摘花の色に出でずは

(恋一・六三二)

と、『拾遺集』に入集を見ている。

さらに、『拾遺集』には、紅花染めに寄せつつ、苦しい現在の状況を詠嘆した

37 紅の八しほの衣かくしあらば思ひそめずぞあるべかりける

(恋五・九七五)

や、変わることもない愛情を表現した

38 限りなく思ひそめてし紅の人をあくにぞかへらざりける

(恋五・九七八)

といった詠が見出せる。

また、掛詞・縁語を駆使した

39 ふみそめて思ひ帰りし紅の筆のすさみをいかで見せけん

(恋部上・三七三、小大進)

という『金葉集』の一首は、「紅の筆」という新奇な表現を用いて、気まぐれな相手の変心を非難したものである。

4. 乙女の匂い立つ美しさ—むすびにかえて—

以上、「紅」を詠み込んだ和歌を、『万葉集』、ならびに、八代集を中心として見てきた。自然の景物を捉えたものとしては、紅葉の鮮やかさを表した詠歌が見られたのであるが、その中でも、川の紅葉葉を捉えた歌々が印象的な表現を示していた。これは、紅という色が水に濡れることによ

て、より艶やかで鮮明な色合いを現出するという特性を的確に物語っているであろう。そして、「紅」は、漢語「紅涙」の訳語として、「涙」とともに恋歌に頻用されたが、これも「紅」という色が内包する澄明感を示唆した好例と言える。また、紅花染めに関わる表現がさまざまな恋情を喩えるかたちで用いられたが、それらの表現には恋に物思う女性の姿が前提としてあったことを見逃してはならない。

おわりに、『万葉集』に用例をもとめて、人目にたつ鮮やかな色彩、とりわけ、若い女性の美しさを表した「紅」を見ておこう。

40 紅に衣染めまく欲しけども着てにははばか人の知るべき

(万葉・七・一二九七)

41 紅の深染の衣下に着て上に取り着ば言なさむかも

(万葉・七・一三一一)

目新しさも与ってか、紅は人目に立つ色として見る者に鮮烈な印象を与えた。その色鮮やかさは、当然のごとく、

42 春の苑紅にはふ桃の花下照る道に出で立つ少女

(万葉・一九・四一三九)

と、桃花と競い合う少女の美しさを表現するものとして用いられた。そして、その紅は、

43 松浦川川の瀬早み紅の裳の裾濡れて鮎か釣るらむ (五・八六一)

44 少女が春菜摘ますと紅の赤裳の裾の春雨に…… (一七・三九六九)

とあるように、野山に出でて、鮎を捕り、また、若菜を摘み取るみずみずしい少女たちの澆刺とした美しさを表した。上の表現に見るように、紅は、水に濡れることによって、いっそう美しさを際立たせて照り映えるのであるが、それはまた、少女のみずみずしい美しさをも鮮明に描出している。

主要参考文献（順不同）

伊原 昭『古典文学における色彩』（笠間書院・1979）

伊原 昭『平安朝文学の色相』（笠間書院・1967）

中江克己『色の名前で読み解く日本史』（青春出版社・2003）

「日本の美学 5 特集・色」（ぺりかん社・1985）

長崎盛輝『日本の伝統色』（青幻舎・2001）

* 和歌の引用は、『新編国歌大観』の本文に拠り、一部、私に表記を改めた箇所がある。

* 本稿は、平成16年8月20日、上田情報ライブラリーで開催された第25回上田女子短期大学公開講座「色・いろ・Collor」における「紅の文化史」の発表資料をもとに新たに執筆したものである。

